

Title	対話的構築から<対話的還元>へ：研究者が「当事者でもあること」を問いなおす
Sub Title	
Author	宮下, 阿子(Miyashita, Ako)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.20- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：生きられる経験/当事者/当事者研究
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0020">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0020</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 対話的構築から〈対話的還元〉へ

—研究者が「当事者でもあること」を問いなおす—

宮下 阿子

### 1. はじめに

研究者が「(研究対象の) 当事者でもあること」は、研究または調査においてどのような意味を持ちうるのだろうか。筆者は、「摂食障害 (Eating Disorders)」と呼ばれる出来事を、実際に経験している当事者でもある。そして、そのことを明示しながら、同じく摂食障害を経験している当事者たちにインタビュー調査を行ってきた。

このような立場にある研究者は、社会学だけを見ても少なからず存在する——ただし、自らが当事者でもあることに言及しているかどうかは別として<sup>1)</sup>。たとえば、摂食障害研究では、野村佳絵子 (2008) や中村英代 (2011) が挙げられるだろう。そして、中村が記しているように「個人の経験が研究にも影響していると考えれば、調査者側の多様性は、摂食障害研究の多様性にもつながっていく意義ある違いといえよう」(中村 2011: 11)。

他方、近年では「当事者研究」(浦河べてるの家 2005; 綾屋・熊谷 2008) が注目され、国内外で広がりを見せている。そこでは、当事者が自らの体験や問題について、仲間と共に「研究」するという実践が行われている (石原編 2013)。「研究」とはいえ、それは「通常の研究手続きに沿って行われるものではない」(石原 2013a: 3)。したがって、「一般の科学研究とは異なる文脈にあるものの」、「当事者研究」が果たす機能は<sup>2)</sup>、そこに取り組む当事者本人のみならず、「治療」や「科学研究」においても「インパクトを与える可能性を有している」(石原 2013b: 12)。

さて、どちらも「共同作業」という点で、(研究対象の) 当事者でもある研究者によるインタビュー調査と「当事者研究」とは重なり合うところがある。そのため、筆者はこれまで (自分の研究が)「当事者研究とは何が違うのか?」という問いをしばしば投げかけられてきた。そこでたとえば「私は当事者でもあるが、社会学の研究者です。だから、この語りを社会的に読み替えていく作業をしたいと思います」と答えるのは、いささか陳腐な気がする。先述の問いは、「問題意識の形成や視座の選択に至るまで、調査のすべての過程は、調査者の経験や価値観からまぬがれえない」(中村 2011: 10) とはいえ、もはや研究者が当事者でもあるという「前置き」や「反省」だけでは済まされないことを意味している。言い換えれば、あえて研究者が自らも当事者であることに言及するのであれば、それが研究ないしは調査にどう反映されており、さらには成果としてどうあらわれてくるのかが示される必要があるだろう。

そこで、以下ではまず、研究者が「(研究対象の) 当事者でもあること」が、筆者の研究におけるアプローチにどう関係してくるのかを提示する (第 2 節)。次いで、インタビュー調査の方

法として、調査者が「当事者でもあること」が何を可能にするのか（第3節）、事例をひとつ取り上げる（第4節）。最後に、研究者が「当事者でもあること」を問いなおしたとき、この先の課題として何が問われていくのかを考察し、本稿のまとめとしたい。

## 2. 〈摂食障害〉の生きられた経験へ——現象学的アプローチを取り入れる

筆者の研究では、摂食障害と呼ばれる出来事（以下、適宜〈摂食障害〉と略記）について、それを「病理」として解釈することをいったん保留——病名をいったんはずす——し、“食”をめぐる出来事として主題化することで、当事者の生きられた経験へと接近していくことをさしあたりの目的としている。

本人が診断を受けているか否かにかかわらず、こちらが〈摂食障害〉の当事者にインタビュー調査を依頼している時点で、拒食や過食、嘔吐といった出来事は、その本人（調査協力者）にとって、すでに病名によって分節化されているといえる。もちろん病名をどう引き受けるかは人それぞれであるが、出来事に対する「名づけ」（ここでは病名）が、ある特定の物語を呼び込むことは少なからず起こりうるだろう。たとえば、筆者がそうであったように「本やインターネットを開けば、いくらでも〈プロット〉を手に入れることができる」（宮下 2014: 60）。

こうした前提を考えたとき、①個人がある出来事をどう意味づけ、それがどのような物語（ストーリー）として語られるのか、と同時に、②出来事それ自体がどのような体験であるのかが問われてみてもいいだろう。両者はどのように関係してくるのだろうか。たとえば過食と呼ばれる出来事がある。過食かそうでないかを量的に区別することは難しい。このとき、いわゆる症状としての「過食」と、ただの「ヤケ食い」とは、経験的にどのような違いがあるのだろうか。それは文脈によって規定（意味づけ）されるのか、そもそもまったく別ものなのか。

上記、①②を検討していくうえで、筆者の研究では「現象学的アプローチ」を取り入れる。具体的には、摂食障害と呼ばれる出来事について、第一義的に病理として括る専門知によって構成された解釈をいったん相対化し、出来事そのものへと立ち返ることを試みる、というものだ。その際に、現象学における「事象そのものへ」という標語を借りることにした。とはいえ、「そもそも事象が何であるのかが分かっているならば、それへと向かう必要はない」のであり、そこには「最終的な明示不可能性」が存在する（稲垣 2012: 184）。したがって、「現象学的還元」と呼ばれるものは、「決して絶対的境地へ導くものではない」（桜井 [1985] 1988: 39）。

同様に、おそらく私たちは出来事そのものへとどれだけ回帰していこうとしても、さまざまな関係性から逃れ出ることはできず、そこには絶えず〈他者〉が存在する。そのため、筆者の研究では、出来事そのものへと立ち返るという試みにおいて、ひとまずそのものは括弧に入れて、“食”をめぐる出来事という制約をかける。「摂食障害」という「病名」をいったんはずすことで見えてくるものは、「食べない」「食べられない」「食べたら止まらない」「どうしてもなく食べてしまう」「食べたら出さずにはいられない」といった、“食”をめぐる出来事である。たとえば雑賀恵子は、著書の中で次のように記している。

わたしたちは、食べるという行為を通じて、すでに数多の生命体や物質と関係性を持っている。そう、すでに。わたしたちは、孤独に存在する、と表現することはできるが、他者との関係性を断ち切って存在することは不可能なのである。(……) すでに、わたしは、物質的レベルでも、社会的レベルでも、あらゆる関係性の中に逃れようもなくおかれてしまっている。(雑賀 2008: 24-26)

“食”をめぐる出来事へと降り立っていくことは、個人が抱えているさまざまな関係性からの逃れられなさ——たとえば食べ物、身体、性・ジェンダー、(自分以外の) 他者、そして社会からの逃れられなさ——に、私たちが気づききっかけを与えてくれるかもしれない。また“食”は、誰もが経験している出来事である。その意味では、“食”をめぐる出来事として主題化することは、〈摂食障害〉の生きられた経験が当事者のみに閉じられることなく、(非当事者としての) 他者に向けても開かれたものとなりうるための、ひとつの賭けでもあるだろう。

こうしたアプローチは、筆者が「当事者でもあること」に由来する。もちろん、実際に研究の対象となるのは調査協力者の語りであり、それは「私」ではない他者の語りである。調査者と被調査者という意味でも、当事者 A と当事者 B という意味でも、双方は他者である。加えて、「研究者としての『私の研究』に当事者性が反映されることと、当事者としての『私の体験』を言語化することとは意味が異なる。両者はどこかで切り離されていく」(宮下 2014: 73-74)。だがしかし、先述した研究者としての「私」の問いは、当事者としての「私」の問いでもある。〈摂食障害〉について考えるとき、ひとつの参照先として、そこには少なからず当事者としての「私」がいる——おそらくそこから逃れきることはできないのだろう。このように、出来事そのものへと立ち返ろうとするとき、省みる先となる、摂食障害と呼ばれる出来事を体験していることが、すなわち、研究者が「(研究対象の) 当事者でもあること」が現象学的アプローチを可能にさせている。またそれは、出来事そのものへ——病名をいったんはずすことで、何が見えてくるのか——というひとつの分析視角であると同時に、インタビュー調査を経て他者の経験へと寄り添っていくとき、筆者の当事者経験を括弧に入れるという両義的な意味も持っている。

### 3. 対話的構築から〈対話的還元〉へ

現象学的アプローチは、インタビューの方法においても関係してくる。前節で提示した2つの問い——①個人がある出来事をどう意味づけ、それがどのような物語(ストーリー)として語られるのか、と同時に、②出来事それ自体がどのような体験であるのか——を当事者の語りをもとに検討していくとき、インタビュー調査ではどのような聞き取りを行えばよいだろうか。また、そのとき調査者が「当事者でもあること」は、調査協力者とのやりとりにおいて、どうかかわってくるのだろうか。

筆者の研究では、インタビュー調査に際して、調査者が「(摂食障害の) 当事者でもあること」を事前に伝えて、調査協力者の前に〈当事者〉としてあらわれるという方法を戦略的に取っている。いうまでもなく、インタビュー調査では、「語り手」にとって「聞き手」が誰であるのか、どういう立場の相手と対面しているのかが、少なからず相手の語りを左右する。その語り、(聞き手または聞き手以外の) 誰に対して、何を聞いて欲しい／欲しくないものとして受け手の側に向けられているかによって、出来事のどの側面が、どこまで語られるかは異なってくるだろう。このとき、調査者が〈当事者〉として調査に臨むことは何を意味するのか。

さしあたり、次のようなことが可能性として考えられる。すなわち調査において、調査者が「私も当事者である」という言明は、あらかじめ体験の共有可能性が閉じられていないことを意味する。もちろん、今尾真弓が指摘するように「研究者における当事者経験・立場が、対象者のそれと共有されるという現象は、必然ではなく、起こり得る1つの『可能性』の範囲を越えない」(今尾 2007: 85)。さらには、「摂食障害」とひとくちに言っても、個人によってその経験はさまざまであり、それは医学文献に記されている「臨床像」や「病因の仮説」の多さを見ても一目瞭然である(切池 [2000] 2009)。しかし、ここで重要な点は、実際に共有できるか否かではなく、あらかじめ体験の共有可能性が閉じられていないという〈期待〉があることだ。このことが、たとえば当事者同士の「あるある話」を可能にさせる。「調査者」と「被調査者」の関係において、調査者による「あるある」的な発話は語りの誘導とみなされうる。けれども、両者が「当事者A」と「当事者B」という関係になったとき、双方による「あるある話」は、必ずしも語りの誘導として排除されるべきものとは限らないのではないだろうか。

では、(摂食障害) の体験について、調査者と調査協力者のあいだで、あらかじめ共有可能性が閉じられていないことは、インタビューにおいてどのようなアプローチを可能にするのか<sup>3)</sup>。筆者の研究では、その方法を〈対話的還元〉と呼んでいる。〈対話的還元〉は、ある特定の文脈やフレームのもとで構成された物語(ストーリー)を、インタビューにおける相互行為の中でひとつひとつのフレームを剥ぎ取っていき、出来事そのものへと立ち返っていきこうとするアプローチである(したがって、別のフレームをあてはめるということではない)。このとき、〈対話〉をする両者が、省みる先となる摂食障害と呼ばれる出来事を体験していること、それをどちらも了解していることが、〈還元〉において少なからず有利な条件となっている。また、そこにおける調査者は、かなりの「アクティブ・インタビュアー」(Holstein & Gubrium 1995=2004)ということになるだろう。

これまでのインタビュー調査を振り返ってみると、前節で提示した2つの問いのうち、①は「対話的構築」(桜井 2002, 2005)と呼ばれるアプローチによって<sup>4)</sup>、他方、②は〈対話的還元〉と呼びうるアプローチによって、それぞれ聞き取りが行われている(図1)。前者では、一連の経験が個人の物語(ライフストーリー)として聞き取られ、後者では、ある特定の文脈からはこぼれ落ちていくようなエピソードであったり、当事者同士の「あるある話」となる出来事が語られたり語り合われたりしている。

たしかに、語りそれ自体が相互行為によって「構築」されたものであるとするならば、前者も後者も、対話的に構築されていることになるが、両者を同一のアプローチとして位置づけてしまうことには違和感がある。なぜなら、両者のアプローチが向かっている方向は、まったく正反対だからだ。インタビューの中で、対話的に構築されたストーリー (①) を、もう一度、〈対話的〉に〈還元〉していく (②)。その作業の先に見えてくるであろう、個人が「摂食障害の経験」をどのように意味づけ物語るのかということと、摂食障害と呼ばれる出来事それ自体がどのような体験であるのかは、おそらく別ものだ。そこから、次なる課題として、摂食障害と呼ばれる出来事を第一義的に病理として括ることが、何を意味し、何を取りこぼしているのかを考えていく<sup>9)</sup>。それが、筆者の研究において、〈対話的還元〉を取り入れるひとつの狙いである。

先述のとおり、〈対話的還元〉では、双方が省みる先となる出来事をゆるやかに共有していることが、出来事そのものへと立ち返っていくときに少なからず有利にはたらいている。ただし、調査者と調査協力者が当事者同士でもあることは、ひとつの条件に過ぎないため、別の条件によって、同じ内容 (データ) が得られるという可能性はある——たとえばカウンセリングの場など。言い換えれば、「何が語られたか」を重視し、「いかに語られたか」を問わないとすれば、調査者が当事者でもあることに言及する意味は減じてくるだろう。

以下では、インタビュー調査における 2 つのアプローチの違いによって、その場で何が語り出されてくるのか、実際の事例を取り上げてみたい。

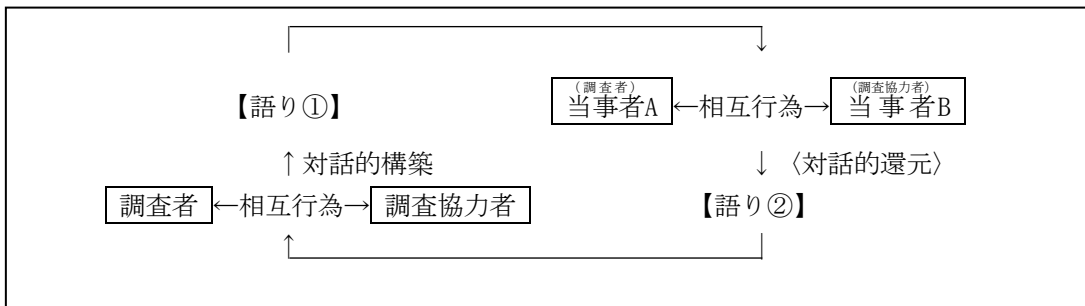


図 1 対話的構築と〈対話的還元〉

#### 4. 事例——ある「過食」と「嘔吐」の語りから

ここでは、B さん (20 代/女性/過食・嘔吐) へのインタビューから一部を事例として取り上げる<sup>9)</sup>。調査のはじめに、自己紹介やこれまでの経緯を簡単に伺ったあとで、調査者は、B さんが「過食」や「過食嘔吐」といった出来事について、「今」、自分なりにどう理解しているのかを尋ねてみた。

- \*：今、自分の過食なり過食嘔吐なりについては、どういうふうに理解していますか？
- B-1：ストレスが溜まったときとか、嫌なことがあったときに、結構過食とか過食嘔吐するので、ひとつのストレス発散なのかなってというのは、どこかにあって。あとなんか、気持ちのよりどころであったりとか（……）。
- \*：そのストレスっていうのは、普段の生活の中で、みんなが感じているようなストレスと同じなのか、それとも何か特別に、これが原因みたいなものがあるのかな？
- B-2：うち、あの…、摂食障害だけじゃなくて、うつも入っているんですよ。そういううつとかで落ち込んでしまったり、自分はなんてダメな人間なんだろうっていうふうに思い始めると、なんか食べ物を目の前にすると止まらなくなったり（……）。急に、ああもう今日は過食するしかないって、急に思ったりして、人と同じようなストレスの発散口がわからなくて（……）それが私の場合は過食であったり、過食嘔吐であったりとか。

上記、B-2に点線で示した「自分はなんてダメな人間なんだろう」と思い始めると、「なんか食べ物を目の前にすると止まらない」という語りは、これだけを見ると「原因→結果」として繋がらない。この語りを了解できるように説明しているのは、先にB-1で語られた、「過食」や「過食嘔吐」に対する「ひとつのストレス発散」や「気持ちのよりどころ」といった意味づけである（ただし、〈摂食障害〉に対するBさんの意味づけは、より多義的であり、これはその一部である）。これらの意味づけを手がかりに、何が「ストレス」や「嫌なこと」であるのか、また、どうして「気持ちのよりどころ」や「発散」となるのかを聞き取っていくと、「何かを原因とする摂食障害」、あるいは「何らかの行為としての摂食障害」というかたちで、Bさんの物語を回収していくことができるだろう。その物語は、インタビューにおける相互行為の中で、対話的に構築されていく。

どのような文脈で「摂食障害の経験」が語られるかは、個人によっても、また調査者の質問によっても異なってくるが、もうひとつ大きく関係してくるのが時間である。過去から現在という時間軸の中で、さらには、今現在の本人の状態（状況）によっても、（過食・嘔吐といった）出来事に対する意味づけは少しずつ変化していくだろう。たとえば、先述のBさんの語りは、「今」の時点における意味づけであるが、「過去」の時点では、また別の意味づけがされている。インタビューのはじめに、これまでの経緯を尋ねたとき、Bさんが「摂食障害の経験」のはじまりとして、最初に語り出したことばは「ダイエット」であった。

- \*：じゃあ、摂食障害の経験について、ざっくりでいいので（……）簡単に教えてもらえますか？
- B-3：中学2年頃から、周りの子はダイエットっていうことで、食べないっていうふう。拒食ではないけど、なんかお菓子を減らしていたら、その反動と部活のストレスで過

食になって。

このはじまりの背景には、「ダイエット (の反動)」や「部活のストレス」以外にも、複数の文脈があるようだ。

\* : ダイエットがきっかけ…、

B-4 : ダイエットとか…、だったり…、

\* : うん。…かといって、みんながみんな摂食障害になるわけじゃないじゃん? (……) 自然な流れでなったっていう感じ?

B-5 : ほかに (……) 寂しさを埋めるために食べていたっていうのもあるんですよ。そのときに、なんか…、家庭環境上手くいってないわけじゃないんですけど (……) 家に帰っても 1 人とか、そういうのがあったりして、話を聞いて欲しいとか。友人関係が、私、上手くいってなくて、そのときに。(……) それで話を聞いて欲しいって思ったりしたんですけど、まったく…そのときに (聞いてくれる人が) いなくて、唯一、気休めというか、埋められるものが食べ物だったっていうのもあって、すぐに過食になりましたね。部活も上手くいってなくて、(……) 部長をやったりして、まとめなきゃいけないのに、みんなはなんか聞いてくれないとか。(……) 水泳部だったので、水着じゃないですか。余計に嫌だったりとかで (……) それもあって、痩せなきゃ、でも食べたいっていうのもあって、それで。

上記、B-5 の語りは、「～もある」「～たり」「～とか」という並列表現が特徴的である。「痩せなきゃ、でも食べたい」という相反する気持ちの中で、B さんは「過食になって」いくが、その背景には「ダイエット」「家庭環境」「友人関係」「部活」といった、さまざまな文脈が控えており、ここでは「気休め」や「(寂しさを) 埋められるもの」として「過食」が意味づけられている。このように B さんの語りを見ていくと、そこには〈摂食障害〉を語りうる、いくつかのストーリーが見え隠れし、それは「たり」「とか」といった並列表現があらわすように、常にどこか「語り尽くせなさ」をともなって語られている。過去から現在へと横並びに連続していく 1 回 1 回の出来事 (過食・嘔吐) は、それがひとまとまりの経験 (摂食障害の経験) として語られるとき、複数の文脈が折り重なった、縦並びに層化された〈経験〉となる。したがって、「摂食障害の経験」と呼びうるものは、個人ごとの多様性ととも、個人内の重層性を内包していることに注意を払っておく必要があるだろう。このとき、個人の〈経験〉に折り重なるひとつひとつのストーリーを剥ぎ取り、出来事そのものへと立ち返っていこうとするアプローチが、次に見ていく〈対話的還元〉である。

それでは、〈対話的還元〉によって何が見えてくるのか。私たちは、ある出来事を分節化するとき、「言語」による分節化と「身体」による分節化の両方で了解をしようとする。言語による



分節化とは、たとえば、摂食障害と呼ばれる出来事に、「摂食障害」という名前を与えることであり、また、摂食障害と呼ばれる出来事のある特定の文脈の中に位置づけることである。ここまで見てきた B さんの語りは、言語（≒対話）によって分節化（≒構築）したストーリーとして、ひとまずは読み取ることができるだろう。だがしかし、言語と身体による分節化は、常に同時にされうるわけではない。それは語りの中で〈綻び〉として見えてくる。たとえば、B-2 に下線で示した「急に、ああもう今日は過食するしかないって、急に思ったりして」という語りは、「〇〇だから、過食する」と説明（理由づけ）された前後の文脈に回収されていかない。そこには、ただ、そうしてあるとしか言いようのない「唐突さ」と「語りえなさ」が漂っている。このような「上手く説明できないもの」に、〈輪郭〉を持たせていくために、出来事それ自体（の語り）を追っていく。それが対話的構築から〈対話的還元〉へと構えを変える目的である。

では、先ほどの B さんの語りにあった「急に、ああもう今日は過食するしかないって、急に思ったりして」とはどういうことだろうか。これは、以降のインタビューの中で、「スイッチ」ということばになぞらえて語りなおされていく。以下の語りは、「スイッチ」ということばが、最初に語り出された箇所である。

\*：結構厳しいの？指導とか。

B-6：そうですね。部活もやってて、あと□□にも行ってるんですよ。

\*：超本格的じゃん！

B-7：そうなんです。高校から始めたんですけど、（……）部活が週に4回あって、17時から20時っていう、ちょうど夕飯の時間じゃないですか。（……）部活が終わって、家に帰ってくるのがほんと22時前くらいなんです。だから、お昼からそれまではまったく食べていないので…。（……）で、なんかお腹が空いたって、最初に食べ始めるとスイッチが入っちゃって。

\*：ああね～。

B-8：あるんですよ。 そうなんですよ。

「スイッチ」が入るといふ身体的な経験は、「ああね～」、「あるんですよ。そうなんですよ」というやりとりが示すように、両者のあいだで共有されている。そして、この「あるある話」がきっかけとなり、以降では、「スイッチ」が入るといふなぞらえによって語りなおされた身体的な経験が、「過食」や「過食嘔吐」といった出来事それ自体を追っていく語りの中で〈輪郭〉を持ち始めていく。その途中で、Bさんにもう一度、冒頭で「過食」や「過食嘔吐」の背景として語られた「ストレス」について尋ねてみた。

\*：（普段の生活で、頭の中が）食べ物のことでいっぱいってことはある？

B-9 : いっぱいのときもあります。

\* : いっぱいのときってどういうとき？やっぱりストレスが溜まったり、ネガティブ思考になったとき？

B-10 : (そういう) ときとか、今日は過食したいなって思いながら、ごはんを食べて、でも過食ができなかったときとか。朝とか、朝から過食がしたいなっていうときとか。(… …) 昼はお弁当を持って行ってるんですけど、お弁当でご馳走さまをしたあとも、足りないなとか、過食したい、過食したいって思っていると、そこからもう食べ物のことばかりなので…。なんかじゃあ、あそこでこれ買って、ああしてこうして、ここで食べれば見られないかなとか、そういうことを考えてしまったり。やっぱりストレスが溜まったり、たまたま体重計に乗ってとか、そういうときにやっぱり減らさなきゃいけない気持ちと、食べたい気持ちと、半分半分で闘っていて、厄介なネガティブなやつが来ると、やっぱり食べたいっていう気持ちが勝っちゃうので、どうしても食べ物に頭が支配されます。

「食べ物に頭が支配される」ときについて、それは「やっぱりストレスが溜まったり、ネガティブ思考になったとき？」と確認すると、Bさんは「やっぱり…」と「ストレス」や「ネガティブなやつ」について反芻しながらも、「そういうときとか」というように、それだけではないことを語りの中にのぞかせている。B-1 から B-5 までの語りでは、Bさんの「摂食障害の経験」が、その背景にある「ストレス」や「対人関係」といった文脈のもとで語られていたが、他方、B-10の語りでは、それが“食”をめぐる出来事(それ自体)として語りなおされていく。前者では、「気持ちのよりどころ」や「発散」、「寂しさを埋めるため」や「気休め」など、〈私〉にとって「過食」が意味(目的)を持ったものとして語られていた。しかし、後者では、「スイッチが入る」「支配される」という表現にあるように、「過食」という出来事において、〈私〉が身体的に投げ出された状態となっていくさまが語られている。そこでは、「過食を始める」よりも、「過食が始まる」と言った方がじっくりくるかもしれない。Bさんが語る「スイッチ」とは、たんなる場面の切り替わりではなく、まさに身体的なモード(状態)の切り替わりとして読み取ることができるだろう。では、この「スイッチ」は、一体〈誰〉が押すのだろうか。

\* : スイッチが入る瞬間ってさ、具体的にはいつ入るの？

B-11 : そうですね。ちょっとだけ甘いものを食べようって思ってた、食べて、「あ、これはいかん！」と思った瞬間にもうスイッチが変わっちゃって、これは食べちゃおうってなったり、最初からスイッチが入っているときも(ある)。「ああ、しんどいわ、もう何もしたくない」とか、「全部嫌だ、全部嫌だ……しよう！」みたいな。突発的が多くて、こうこうこうで、ああだからスイッチが入りました、よっしゃ！しましよう！ではないですね。

Bさんによれば、(過食の)「スイッチ」は食べる前に入るときも、また、何かを食べている途中で入るときもあるという。それは自分で入れるときもあるが、「だいたい勝手に入って」おり、1人のときだけではなく、「友だちと居ても入ることがある」そうだ。そして、いったん「スイッチ」が入ってしまうと、「食べたい」よりも「食べなきゃダメだ」というように、「過食」が「義務的なもの」になるとBさんは語る。

B-12：(スイッチが入ったあとは)もう余裕がない、とりあえず。(……) こうして、ああしてって、食べ物一直線になって、気持ちがもうソワソワしちゃって、食べたい食べたい食べなきゃダメだ、みたい。食べたいより、食べなきゃみたい、義務的なものになっちゃってることがありますね、スイッチが入ると。

そこにおける「過食」は、もはや「食べる」という振舞いではなくなり、身体の中にモノを「詰め込む」作業として「義務的」に遂行されていく。「スイッチ」が入った(私)の身体は、(まさに、「スイッチ」ということばに表現されているように)どこか機械的で、「一定で、一直線で」、「感情っていう感情はない」という。

B-13：とりあえずもう詰め込むことに一心不乱なので(……) 過食しているとか、楽しいとかではなくて、もうあとで吐くからいいや、(もう)知らないみたいな感じで、ガーって、とりあえず一定で、一直線で行ってて。

\*：そのときは、もう何も考えないみたいな感じ？

B-14：考えないです。考えるとしたら、次はあれ食べよう、これ食べようとか、どこで(どのタイミングで)お水を飲もうとか、(……) (見つからないように) 誰か来ないかなとか、メールも何も一切見ない。(……) そのまま一直線でずーっとしてて、あ〜、ヤバイヤバイ、もうこれは出さなきゃ〜っていうときになっても、とりあえず(今度は)出すことでいっばいになるので、頭の中はどうやったら出るかっていうことばかりなので。

「一心不乱」に「詰め込む」作業のあとには、それをきちんと取り出すための「確認作業」が待っている。Bさんによれば、「過食」で詰め込むモノや順番は決まっており、それは「嘔吐」における「確認作業」のためでもあるという。たとえば、唐揚げなどの「揚げもの」は、最終的に吐き出すとはいえ、「地味にそこだけカロリーが(笑)」と、「小さな抵抗」から食べないようにしているそうだ。しかし理由はそれだけではなく、「揚げもの」が「(胃の) この辺でひっついちゃったり」、それが「真ん中にあるおかげで」、先に詰め込んだモノが出てこないと困るからだという。

B-15 : 今、これ出た、あれ出たって思って、順番で、たしかこれ食べてったよなって。うろ覚えなんですけど、この辺だったら、ここまできたのかなって。でも、多分、胃の中には 3 割 4 割はまだ残っていると思います。その状態でも。(……) 5 割以上は絶対に出さないと自分はトイレから出ないし、吐くときも水を持って行くんですよ。途中でやっぱり、最後に水を飲むので、水から出ちゃうじゃないですか。(……) あの方方は、固まって層になっている感じなので、なかなか出てこない。揺すらないと。

\* : 私も。(……) 私も目で確認するんだよね。水を飲むのはどうして？

B-16 : 出しやすくするため。(……) あと、あまりにも固まっていると、確認するときに見えないので、確認作業のためっていうのもあります。

\* : それすごいよね。確認作業のためって。

B-17 : 「あ〜、うん、うん、うん」って(確認) しますね。

こうした「確認作業」をしてまでも、それらのモノを嘔吐する理由を、B さんは「ここに居てはいけないから」(食べ物が身体の中にあってはならないから) と語る。それが、たんに「体重が増えるのが嫌だ」という意味にとどまらないことは、以下の語りを見てもらえればわかるだろう。

B-18 : (家族は、摂食障害のことを知っているけれど) なってないじゃないですか。だからわからないっていうところもあると思うので、「なんで吐くのかかわからない」って、絶対思っていると思うんですよ。

\* : うん。なんで吐くのかかわからないって、私もよく言われるんだけど(……) どう答える？「どうして吐くの？」って聞かれたら。

B-19 : ここに居てはいけないから。

\* : 食べ物が胃の中に居てはいけないから？

B-20 : はい。…ていうのと、体重が増えるのが嫌だっていうのもありますね。そのどっちかですね。

以上、ここまで目を通してきたように、「急に、ああもう今日は過食するしかないって、急に思ったりして」という、語りの中の〈綻び〉(上手く説明できないもの) から、出来事そのものへと降り立っていくと、“食”をめぐり出来事としての「過食」や「嘔吐」の生きられた経験が、その〈輪郭〉を纏って見えてくるのではないだろうか。また、そこでは「ああね〜」「私も」といった、当事者でもある聞き手の「相づち」が、(聞き取りではなく) 語り合いの中で出来事を再現していくひとつの鍵となっている。

## 5. おわりに

摂食障害と呼ばれる出来事の語りにくさは、実のところ私たちが日々経験している“食”をめぐる出来事の語りにくさでもある。私たちが“食”に与える意味は多義的であるが、他方でそれは、身体をめぐる出来事として、言語による分節化から逃れていくという両義性を持っている。このとき、出来事そのものへとまなざしていく視線は、本人たちが生きている〈世界〉を、ある特定のプロットに沿った物語（ストーリー）——病理として括ることも、そのひとつだろう——とは、また別のかたちでつかまえようとする。そこにおいて、当事者でもある「聞き手（調査者）」は、「語り手（調査協力者）」が省みる先となる出来事をわずかながらも知っている〈伴走者／伴奏者〉となる。あるいは、それではしかない。Bさんの事例からは、摂食障害と呼ばれる出来事が、一見すると、私たちの“食”と地続きでありながらも、スイッチが入り、モードが変わり、「食べる」という意味を離れて、身体にモノを詰め込み、それをまた取り出すという、どこか機械的であり、義務的な作業へと切り替わっている様子をうかがい知ることができる。そこにおける〈私〉は、まさに食べながら食べられているような、主体的な行為者でありつつ、身体的な存在として〈世界〉に投げ出されている。

さて、先述のとおり、筆者の研究を「当事者研究」と言ってしまうことはできないが、そこに「当事者研究」との連続性が垣間見えることは、たしかに否定できないだろう。ここまで記してきたように、研究者が「(研究対象の) 当事者でもあること」は、こうして反省的に捉え返してみると、研究ないしは調査のアプローチにおいて、実は深く関係してくるひとつの条件としてはたらいっている。とはいえ、いうまでもなく当事者の経験に寄り添っていくことそれ自体は、何らかの条件によって「当事者だからできる」という側面もある一方で、決して「当事者にしかできない」というわけではない。このとき、私たちには次の課題が見えてくる。それは、他者の経験を、〈私〉を媒体として、また別の他者に伝えるとき、〈私〉が何者であるかがどうかかわってくるのか、という問題だ。「当事者研究」のように（1）当事者の経験を「当事者」が伝えること、筆者の研究のように（2）当事者の経験を「当事者でもある研究者」（他者）が伝えること、そして（3）当事者の経験を「当事者ではない研究者」（他者）が伝えること——そこでは、内容の違いとしてではなく、それぞれが何を伝えられ、何を伝えられないのだろうか。このことは、ひるがえって誰に向けて何を研究しているのかを問うことへと繋がっていくだろう。今回のシンポジウムをとおして、筆者が自らに問いかけてきたことは、おそらくこの一点に絞られる。

### 【註】

- 1) たとえば宮地尚子は、著書の中で「かくれ当事者研究」（宮地 2007）の存在に触れている。ただし、本稿では、「べてるの家」をはじめとして実践されている「当事者研究」と、当事者でもある研究者による研究——これには、宮地が指摘する「かくれ当事者研究」も含まれる——とを区別するため、後者

については「(かくれ) 当事者研究」とは呼ばないものとする。

- 2) 石原孝二によれば、「当事者研究」は、それを実践する当事者たちにとって、「語りを取り戻すことによって、自己を再定義し、人とのつながりを回復することを促すという機能を持つ」(石原 2013b: 12)。
- 3) 筆者がここで問題にしたいのは、調査者が「当事者でもあること」によって、これが聞けて、あれが聞けないということではなく、「当事者でもある」と名乗ることによって、「何を聞いたかったのか」ということである。
- 4) 本稿では、桜井厚による「対話的構築主義アプローチ」(桜井 2002) に倣って、これを理解しておくものとする。このアプローチは、「ライフストーリーの語り、かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたものではなく、語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるものである、とする見方」(桜井 2002: 28) をとる。
- 5) ただし、これについては別稿を期すものとした。
- 6) 2010 年に実施した、B さんへの 1 回目のインタビュー調査より。インタビューの内容は、調査協力者の許可を得て録音し、逐語的に起こしたものを資料とする。

#### 【文献】

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎. 2008. 『発達障害当事者研究——ゆっくりていねいつながりたい』医学書院.
- Holstein, J. A. and J. F. Gubrium. 1995. *The Active Interview*. Sage Publications. (=2004. 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 今尾真弓. 2007. 「当事者『である』こと／当事者『とみなされる』こと」宮内洋・今尾真弓編著『あなたは当事者ではない——〈当事者〉をめぐる質的心理学研究』北大路書房. 80-91.
- 稲垣論. 2012. 『リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション』春風社.
- 石原孝二編. 2013. 『当事者研究の研究』医学書院.
- 石原孝二. 2013a. 「はじめに」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 3-5.
- 石原孝二. 2013b. 「当事者研究とは何か——その理念と展開」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院. 11-72.
- 切池信夫. [2000] 2009. 『摂食障害——食べない、食べられない、食べたなら止まらない (第 2 版)』医学書院.
- 宮地尚子. 2007. 『環状島=トラウマの地政学』みすず書房.
- 宮下阿子. 2014. 「〈私〉を揺さぶる他者を前に——調査者(聞き手)が語り手になるとき」岡原正幸編著『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会. 56-74.
- 中村英代. 2011. 『摂食障害の語り——〈回復〉の臨床社会学』新曜社.
- 野村佳絵子. 2008. 『かなりあしょっふへ、ようこそ! ——摂食障害がくれた宝物たち』筒井書房.
- 雑賀恵子. 2008. 『エコ・ロゴス——存在と食について』人文書院.
- 桜井厚. 2002. 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚. 2005. 「ライフストーリーから見た社会」山田富秋編著『ライフストーリーの社会学』北樹出版.

10-27.

桜井洋. [1985] 1988. 「現象学と社会学」江原由美子・山岸健編『現象学的社会学——意味へのまなざし』三和書房. 28-46.

浦河べてるの家. 2005. 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院.

(みやした あこ 法政大学大学院社会学研究科)